

きたやまウェビナー 2020年8月3日 指定討論

コロナと日本人の心 神話的思考とユーモア

石川与志也
(ルーテル学院大学)

個人的な使用のためのみにお用いください。

コロナ状況における 「神話的思考」という視点

- 朝日新聞デジタルの北山先生のインタビュー記事（5/26）のコロナ禍における「神話的思考」という観点との出会い
→ コロナ禍の中で思考が鈍くなっていたところに、新たな視点が与えられ、自分のところに日本社会や自分自身を考える空間が回復した
- **「ものを怖がらなすぎたり、怖がりすぎるのはやさしいが、正当に怖がることはなかなか難しい」**
(寺田寅彦「小爆発二件」)
- われわれが正当な怖れをもち、自分自身で考え、自分たちの仲間や社会の人々とともに考えながら行動するために、北山先生の「神話的思考」という日本人の深層心理の観点は、意義深い補助線となる。

日常の私たちの心の中に働く神話的思考

- 遠隔授業の延長に対する複数の若者の反応

「自分が誰かに伝染（うつ）して迷惑をかけることになったら“申し訳ない”から、（遠隔になって）よかった」

- 私の感じた衝撃と直観的な感覚

→自分の生活が制約されることの葛藤が表現されなかったことの衝撃

⇒“この若者の反応は、自粛警察という現象と同根ではないか”

→「不潔恐怖と加害不安に動かされた情緒的な神話的思考」（北山）

→神話的思考に基づく「厳しい自粛警察」を心の中にもっている

→日常の生活の中の自分の言動を観察してみると、自分のこころの中にも「厳しい自粛警察」がいると感じることに気づく。

コロナ感染に対する反応の国際比較

(大阪大学三浦教授らのグループによる調査*)

- 「新型コロナウイルスに感染した人がいたとしたら、それは本人のせいだと思う」

「本人のせいだと思う」と回答した人の割合

(どちらかといえば+やや+非常に)

日本	<u>15.25%</u>
アメリカ	4.75%
イギリス	3.48%
イタリア	12.32%
中国	9.46%

コロナ感染に対する反応の国際比較

(大阪大学三浦教授らのグループによる調査*)

- 「新型コロナウイルスに感染する人は、自業自得だと思う」
「自業自得だと思う」と回答した人の割合
(どちらかといえば+やや+非常に)

日本	<u>11.50%</u>
アメリカ	1.00%
イギリス	1.49%
イタリア	2.51%
中国	4.83%

* FNNプライムオンライン (<https://www.fnn.jp/articles/-/57370>) より引用

神話的思考に根差した排除の論理（北山）

- 自己責任論

- 「不潔恐怖と加害不安に動かされた情緒的な神話的思考」（北山）

- 暴走すると差別と排除に結びつきやすい

- 他者排除⇔自己排除

- 追い詰め／追い詰められる

コロナ状況における閉塞感

- コロナ状況での私たちの感じる閉塞感は、見えない感染の不安や収束の見通しの見えなさという不確かさに加えて、自粛することを求め、自己責任論に基づき感染者を非難をする「空気」の圧力と個人の心の中の自粛警察が連動することによるものではないか。
- 自粛は、科学的思考と共同体の一員としての所属感と責任感に基づき自ら主体的に行うときに社会の安全を守るための「忍耐」になるが、外からの圧力や村八分的な非難を恐れ、心の中の自粛警察の圧力によって行われるときに、私たちの生き生きとした心を押し殺す「我慢」もしくは「粛清」となりえる。

生き生きとした空間を持ち続けるために

- コロナ禍において、わたしたちは、どのようにしてこころを押しつぶさずに自由な空間を持ちつづけられるだろうか？
- 人間の心の創造的な働きであるユーモアの観点から、考えてみたい

映画『笑いの大学』

(三谷幸喜原作・脚本；星護監督, 2014)

- 戦時下の規制激しいさなかに喜劇上演に命をかける稲垣吾郎扮する座付作家椿一と、生まれてから一度も心の底から笑ったことがない役所広司扮する検閲官向坂睦男の織りなす物語
- 警視庁の取調室で検閲作業を繰り返しているある日、検閲官の向坂は「どこかに“お国のため”という台詞を3回入れて下さい」と椿に要求する。椿は「喜劇の中にそんな台詞は入れられない」と一度は拒否するが、そうしなければ上演許可は出せないと言われ智恵を絞る。そして次のような喜劇を考え出した。

映画『笑いの大学』

(三谷幸喜原作・脚本；星護監督, 2014)

貫一「お宮さん、私はお国のために戦ってまいります。お国のためなら私は死んでも構わない。お国のためなら」とそこへ現れる寛一の母。

母「貫一さん、ご飯ですよ。今夜はあなたの大好きなすき焼きよ。美味しいお肉買ってありますよ。」

貫一「ああ、お宮さん、僕はお肉のためなら死んでも構わない」

映画『笑いの大学』

(三谷幸喜原作・脚本；星護監督, 2014)

向坂「これはひょっとすると、お国とお肉をひっかけたのですか？」

椿「その通りです。すみません！」

向坂「つまり、お国のためと言っていたのが、いつの間にか、お肉のために変わっている面白さを狙ったと考えてよろしいですか」

椿「はい。」

向坂「それでいいんですか。椿さん！私が言っているのはそういうことではない！」

椿は「すみません！」と言ってこの原稿を丸めて捨てるが、椿が帰った後で向坂はそれを拾い、ひとりこの原稿を見て吹き出す。

『笑いの大学』から学ぶ（1）

- 椿のつくった喜劇：劇中劇
 - 「お国のため」という大義のもとに自粛と犠牲を求める圧力を、「くに」と「にく」を入れ替えるというナンセンスな言葉遊びを用いて、「お肉のため」という人間的欲求の表現とすりかえる
 - ナンセンスな言葉遊びであると同時に、個人の自由と人間性を弾圧するものへの反抗というセンスを表現するという、ナンセンス（無意味）とセンス（有意味）の共存を可能にする「二枚舌的な」表現（フロイト, 1905）
 - 音の共通性や類似性にもとづく多義的表現を多く持つ日本語の特徴を生かしたユーモア的な表現

『笑いの大学』から学ぶ（2）

- 映画の中で生じた向坂の変化

- 一度も心から笑ったことがなかった向坂が笑うようになる
→向坂の心の中の「検閲官」（「自粛警察」）によって抑えられていた生き生きとした心の解放
- “建前”のみを自覚し“本音”は他にないと思っていた向坂が“建前”と“本音”を自覚し、“本音”を語るようになる

物語の終盤、赤紙がきて、「お国のために行ってきます」という
椿に対して、

向坂「生きて帰ってこい。お国のために死ぬなんて口にするな。
君は自分で書いているじゃないか。死んでいいのは、お肉
のためだけだ。」

椿「気に入ってくれたんですね、そのセリフ」

向坂「大好きなんだ」（涙）

コロナ状況とユーモア（1）

- ・ 笑いのもつ諸刃性：創造性と破壊性
 - 創造性：生き生きとした心を蘇らせる可能性
 - 破壊性：誰かを傷つける可能性、不愉快にさせる可能性；
「ワライゴトデハナイ！」；「不謹慎だ！」→自分が攻撃される
- * 笑いは躁的防衛にもなりえる
- ・ それでも私がユーモアに着目する理由
 - （1）東日本大震災後の東北での体験
 - ジョークやユーモアが、恥や罪悪感、タブーを超えて、率直な気持ちを語る空間をつくることを学んだ。
 - （2）ユーモアの特徴
 - ユーモアにおいては自分以外の人間がいようとしまいと、自分の欲求不満やタブーを観察するがそれを受容し、痛みに直面しても自分自身と世界における自分の場所を共感的に笑う心地よさを見出すことができる
(Poland, 1990, 下線部は引用者による)。
 - （3）日本語とユーモアの親和性；臨床経験から

コロナ状況とユーモア（2）

- ユーモアは、空気の圧力と自分の心の中の自粛警察の圧力によって狭くなっていた心を、自由にする可能性をもつ
 - 私たちの外的な状況は変わらなくても、その状況やそこにいる自分自身を異なる視点から見て、その現実異なる態度で向かうことを可能にする
 - 「あれかこれか」の強迫的思考を離れ、矛盾する「あれとこれと」「割り切れないもの」（北山）の共在を可能にする
 - 自由なところの体験を可能にする

おわりに

- 日常生活のふとした裂け目にナンセンス、機知的なものがあらわれうる；それを遊ぶこと、味わうことを許す空間をつくる
- 日本語の多義性、豊穡さ、曖昧さ
 - 概念と概念の差異が明確で抑圧がはっきり作用していると考えられる西洋言語と比べて抑圧が堅固ではないのではないか
 - ナンセンスや無意識的なものが身近に現れやすい
- 「あれとこれと」を現しうる日本語の多義性に代表される日本人の思考の多義性・多様性を包摂する特徴は、ユーモアと親和性があり、それがユーモア的な態度と結びつくときに、「こころの自由」と「胆力」をうむのではないだろうか。

北山先生への質問

- 日本人の「あれかこれか」という強迫的な思考と、「あれとこれと」を現しうる日本語の多義性に代表される日本人の思考の多義性を包摂する特徴は、一見矛盾するようにも思えますが、日本人のこころの中に両方が織り込まれているとも思います。この両者はどのように関連しているとお考えですか？
- 新型コロナウイルスの感染拡大は、世界的な現象ですが、わたしたちが、日本人の神話的思考について考察を深めることは、日本人だけでなく、他の国の人々と対話し、協力していく上でも、重要なことだと思えます。先生はそこにどのような意義と可能性があるとお考えでしょうか？